

## 日本版ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発

豊田 弘司・森田 泰介\*・金敷 大之\*\*・清水 益治\*\*\*

奈良教育大学学校教育講座 (心理学)

(平成17年4月8日受理)

## Development of a Japanese Version of Emotional Skills & Competence Questionnaire

Hiroshi TOYOTA, Taisuke MORITA\*, Hiroyuki KANASHIKI\*\* and Masuharu SHIMIZU\*\*\*

(Department of Psychology, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)

(Received April 8, 2005)

### Abstract

The first purpose of the present study was to develop a Japanese version of Emotional Skills and Competence Questionnaire (ESCQ) originally developed by Taksic (2002) to assess the individual difference in emotional intelligence or competence. The second purpose was to examine the relationship between two other scales, Big-five and Self-esteem. Original version of ESCQ has 45 statements, which has the following three scales: a) ability to perceive and understand emotion, b) ability to express and label emotion and c) ability to manage and regulate emotion. The Japanese participants were 615 undergraduates (132 males and 483 females). They were presented with 45 statements of the original version that were translated into Japanese by authors, and were then asked to rate the likelihood that the behavior represented in each statement occurred on 5-point scales. Factor structure of the total 28 statements of Japanese version was almost a fit with the three factor structure of the original version of ESCQ. Cronbach alpha were satisfactory for the three scales mentioned above ( $\alpha = .91 \sim .65$ ). Each factor consisted of nine or more items with loadings exceeding .34 and having minimal overlap with the other factors. Factor I was marked by 12 statements which was mostly corresponded to the first scale of the original version (Ability of Perceive and Understand emotion). Factor II was comprised 8 statements, which corresponds to the second scale of the original version (Ability to Express and Label emotion). Factor III was comprised of 8 statements which corresponded to the third scale of the original version (Ability to Manage and Regulate emotions). The Japanese version of ESCQ subscales positively correlated with Self-Esteem, Extraversion, Openness, Agreeableness, and Conscientiousness, but negatively correlated with Neuroticism. The gender differences of correlations with Self-Esteem and Neuroticism were observed, namely the correlations were higher for males than for females. These results indicated the validity of Japanese version of ESCQ and that gender difference should be considered for further researches.

**Key Words:** ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire)  
emotional intelligence, Self-esteem

**キーワード:** 情緒的スキルとコンピテンス質問紙  
情動知能,  
自尊感情

## 1. はじめに

Law, Wong & Song (2004) によれば, 近年, 情動知能 (Emotional intelligence; EI) に関しては, 多くの議論が展開されている (Fineman, 1993; Mayer & Salovey, 1997; Schutte, Malouff, Hall, Haggerty, Cooper, Golden, & Dornheim, 1998). そして, 情動知能には, いくつかの定義が存在している. 初期の定義としては Salovey & Mayer (1990) による定義が有名であり, 「情動知能とは, 情動を扱う個人の能力である.」 というものである. 彼らは, 具体的な情動知能の低位能力を以下のように指摘している. すなわち, 自分自身や他人の感情 (feeling) や情動 (emotion) を監視 (モニター) する能力, これらの感じ方や情緒の区別をする能力及び個人の思考や行為を導くために感じ方や情緒に関する情報を利用できる能力である.

この定義以降多くの定義が提出されたが, それらは微妙に異なるものであり, それぞれの定義に対応してその情動知能を測定する尺度が数多く開発された. 例えば, Mayer, Caruso & Salovey (2000) は, 多要因情動知能尺度を開発している. この尺度は Mayer & Salovey (1997) の考えた情動知能の定義に基づくものであった. その定義とは, 情動知能は, 4つの次元に分類できるお互いに関連するスキルの集合体であるというものである. その4つの次元とは, 1) 情緒を正確に評価したり, 表現する能力, 2) 思考を促進するための感情に接近したり, その感情を生成する能力, 3) 情緒や情緒に関する知識を理解する能力, 4) 情緒的, 知的な成長を促すために情緒を調整する能力である.

同じように, 情動知能を4つの次元に分けて定義しているのが, Davies, Stankov & Roberts (1998) である. ここでは, 1) 自分自身の情緒の評価と表現, 2) 他人の情緒の評価と認識, 3) 自分自身の情緒の調整, 4) パフォーマンスをあげるための情緒の利用, という次元である. この4つの次元に基づいて, Wong & Law (2002) は, Wong and Law EI Scale (WLEIS) を作成している.

さらに, Taksic (2002) は上述した Mayer & Salovey (1997) の定義に基づき, 因子分析的な検討を加えた結果, 情緒的コンピテンス (emotional competence) を測定する尺度 (Emotional Intelligence Skills & Competence Questionnaire; EISCQ; Emotional Skills & Competence Questionnaire; ESCQ) を開発している. 彼がコンピテンスという表現を用いたのは, 近年の研究の動向として, 能力や態度から, コンピテンスを測定するという流れがあるからである (Taksic, 2002). ただし, 基本的には, 従来の情動知能の内容と大きな違いはない. この ESCQ の低位尺度は, 1) 情緒の認識と理解能力, 2) 情緒の命名と表現能力, 及び 3) 情緒の管理と調整能力の3因子に対

応するものである. 異なる年齢の調査対象のデータに関する分析の結果,  $\alpha$  係数による信頼性は, 1) 情緒の認識と理解能力尺度が .85~.90, 2) 情緒の命名と表現能力尺度が .79~.82, 3) 情緒の管理と調整能力尺度が .71~.78 であり, 満足できる値であることが示されている. そして, これら3つの尺度間の相関は中程度であり (.35~.50), 尺度全体との相関は高いこと (.88~.92) が示されている. これらの結果は, この尺度の信頼性の高さを示すものである. また, アレキシシミア傾向 (alexithymia; 無感情症) (Bagby, Parker & Taylor, 1993) とは負の相関が得られ, 社会的スキル尺度 (Riggio & Trockmorton, 1986) に含まれる社会的表現 (social expression) や情緒の感性 (emotional sensitivity) と正の相関を見いだしている. さらに, Big Five 尺度 (Goldberg, 1990) における開放性及び自尊感情 (self-esteem) とともに正の相関を見いだしている. このように, 適応の指標である尺度との正の相関, 不適応の指標との負の相関が見いだされ, ESCQ の妥当性も示されている. このように信頼性及び妥当性ともに保証されている ESCQ の日本版を作成することは, 我が国における情動知能研究に貢献することが期待できる.

そこで, 本研究の第1の目的は, 日本語版 ESCQ を作成することである. また, 上述したように, Taksic (2002) が ESCQ と他の性格特性尺度との関連性を検討し, ESCQ が適応の指標である可能性を示している. そこで, 本研究の第2の目的は, ESCQ で測定される情緒的コンピテンスと, 自尊感情及び Big Five における性格特性 (情緒不安定性, 外向性, 経験への開放性, 調和性及び誠実性) との関係性を明らかにすることである.

## 2. 方法

### 2. 1. 調査対象

関西地方にある4つの四年制大学の学生615名 (男132, 女483) であり, これらの学生の平均年齢は, 19歳3か月であった.

### 2. 2. 調査材料

#### 2. 2. 1. ESCQ

Taksic (2002) の原版 ESCQ の45項目を著者4名がそれぞれ別々に翻訳し, それぞれの訳を第一著者が検討して, 邦訳の各項目文を決定した. 各文に対する評定尺度には5段階尺度 (「1. 決してそうでない, 2. めったにそうでない, 3. 時々そうである, 4. だいたいそうである, 5. いつもそうである」) を用いた.

#### 2. 2. 2. 自尊感情尺度

山本・松井・山成 (1982) による自尊感情尺度を用いた. この尺度は, Resenberg (1965) の尺度の日本版であり, 10項目 (例「少なくとも人並みには, 価値のある人

間である]、「色々な良い素質をもっている」等)からなっている。評定尺度は、5段階尺度(「1. あてはまらない, 2. ややあてはまらない, 3. どちらともいえない, 4. ややあてはまる, 5. あてはまる」)である。

### 2. 2. 3. Big Five尺度

和田(1996)によるBig Five尺度を用いた。この尺度は、外向性、情緒不安定性、開放性、誠実性及び調和性に対応する60項目の特性語(例「話し好き」、「悩みがち」、「独創的な」等)から構成されている。評定尺度は、7段階(「1. まったくあてはまらない, 2. ほとんどあてはまらない, 3. あまりあてはまらない, 4. どちらともいえない, 5. ややあてはまる, 6. かなりあてはまる, 7. 非常にあてはまる」)である。

上述した3つの尺度は、B4判2枚の小冊子にされた。

### 2. 3. 調査手続

調査は、著者らの担当授業中に集団的に実施された。上述の小冊子を配布し、まず、調査用紙の記入の仕方を説明し、その後、ESCQ、自尊感情、Big Fiveの順に実施していった。被調査者は、各尺度に対して、評定尺度

の各段階に対応する数字を○で囲んでいった。なお、各尺度実施の間には、3分程度の休憩を挟んで、調査記入の遅い被調査者に対して配慮した。

## 3. 結果

### 3. 1. 日本版ESCQの因子構造

項目-全体相関係数を各項目について算出した結果、原尺度中の4項目が全体合計点との相関が.20より低かった。それ故、これらの項目は、ESCQ全体の構成から逸脱したものとして、削除した。残り41項目に対して、主因子法による因子分析を行い、その後、バリマックス回転を施した。複数の因子に重複して因子負荷量の高い項目を除いて、同様の因子分析を繰り返した。その結果がTable 1に示されている。最終的に28項目が弁別性の高い項目として残された。これらの項目の因子構造に関しては、以下の通りである。まず、第1因子は原版どおり、「情緒の認識と理解能力」に対応する因子であり、12項目.55以上の高い負荷量を確保していた。第2因子

Table 1 日本版ESCQ尺度における28項目に関する因子構造

項 目	I	II	III	M	SD
<b>情緒の認識と理解 (<math>\alpha=.91</math>)</b>					
36)私は、誰かが嫌な気持ちを隠そうとしていても、それに気づく。	.77	.14	.04	2.92	.95
38)私は、誰かが本当の気持ちを隠そうとしていても、それに気づく。	.73	.16	.05	2.76	.93
37)私は、誰かが罪悪感を感じている時には、それに気づく。	.69	.11	.08	2.75	.90
39)私は、誰かの気分が落ち込んでいる時には、それに気づく。	.67	.12	.27	3.31	.88
25)私は、誰かと一緒にいる時の様子を見ると、その人の感情を正確に見きわめられる。	.67	.22	.13	2.72	.87
34)私は、表情をみれば、その人の気持ちがわかり、それを言葉にすることができる。	.66	.29	.15	2.57	.90
35)私は、友達が密かに抱いている嫉妬を見抜くことができる。	.64	.13	-.06	2.70	1.04
18)私は、友達のお気分の変化を見抜くことができる。	.64	.16	.12	3.25	.96
13)私は、知り合いに出会った時には、すぐにその知り合いのお気分がわかる。	.62	.09	.07	2.70	1.00
26)私は、誰かがやる気をなくしている時に気づくのが得意である。	.59	.14	.28	3.10	.98
15)私は、友達が悲しんでいたり、落ち込んでいる時はそれがわかる。	.55	.08	.25	3.58	.92
14)私は、相手の気持ちが分かるときにははたいていそのような気持ちになった理由もわかる。	.55	.09	.09	2.81	1.04
<b>情緒の表現と命名 (<math>\alpha=.88</math>)</b>					
44)私は、自分がどのように感じているかを表現することができる。	.17	.81	.15	2.93	.98
43)自分の気持ちを表す言葉を簡単に探すことができる。	.17	.79	.13	2.70	.96
23)今の気持ちをうまく言葉にすることができる。	.18	.74	.08	2.89	1.03
21)自分の感情をうまく表現できる。	.15	.71	.17	2.86	.98
17)今、自分が感じている感情をうまく表現できる。	.20	.63	-.02	2.41	1.03
2)自分の気持ちや感情をすぐにことばにできる。	.11	.60	.05	3.12	.97
22)自分の気分は、ほとんど理解できている。	.09	.57	.22	3.29	1.05
24)自分の様々な気持ちの状態を知っている。	.18	.55	.22	3.11	1.04
<b>情緒の制御と調節 (<math>\alpha=.65</math>)</b>					
33)ずっとよい気分でいようとしている。	.07	.07	.54	3.66	.99
8)気分のよい時には、なかなかその気分は沈まない。	.07	.07	.51	3.29	1.11
29)不快な感情をおさえて、良い感情を強めようとしている。	.08	.01	.48	3.19	1.05
9)気分のよい時には、どんな問題でも解決できるように思う。	.05	.07	.48	3.23	1.16
40)今の自分の物事に対する感じ方は正常であると思う。	.14	.23	.44	3.35	.93
5)誰かにほめられると、より熱心に頑張るようになる。	.07	.03	.40	4.06	.95
30)私が普段感じることに關してはおかしいところはない。	.07	.17	.37	2.98	.97
11)気分が良くて幸せな時は、勉強がはかどり、頭にもよく入る。	.08	.08	.34	3.36	1.12
寄与率 (%)	19.13	14.67	7.46		

Table 2 ESCQと自尊感情及びBig Fiveとの関係 (r)

尺度	ESCQの下位尺度							
	情緒の認識と理解		情緒の表現と命名		情緒の制御と調整		ESCQ全体	
	男	女	男	女	男	女	男	女
自尊感情	.33	.21	.37	.34	.42	.31	.47	.36
Big Five								
外向性	.28	.33	.25	.40	.43	.36	.40	.47
情緒不安定性	-.14	-.01	-.35	-.18	-.34	-.22	-.34	-.15
開放性	.39	.47	.37	.37	.28	.24	.46	.50
誠実性	.25	.26	.30	.20	.16	.19	.32	.29
調和性	.15	.16	.18	.11	.24	.15	.24	.25

は8からなり、原版通り、「情緒の表現と命名」因子と命名した。第3因子は「情緒の制御と調整」に対応する因子であり、8項目から構成されていたが、 $\alpha$ 係数が低い値であった。ただし、全体としての累積寄与率は、41.26%であった。

また、3つの下位尺度得点の相関関係は、「情緒の認識と理解」と「情緒の表現と命名」間の相関係数が.42、「情緒の認識と理解」と「情緒の制御と調整」間のそれが.32、「情緒の表現と命名」と「情緒の制御と調整」間のそれが.30であった。さらに、ESCQ尺度全体との相関係数は、「情緒の認識と理解」が.84、「情緒の表現と命名」が.76、「情緒の制御と調整」が.63であった。

### 3. 2. 自尊感情尺度及びBig Five尺度との関係

Table 2には、ESCQの各下位尺度得点及び全体得点と自尊感情尺度得点及びBig Five尺度の各下位尺度得点との相関係数 (r) が示されている。自尊感情との関係は、ESCQのいずれの因子 (下位尺度) 及び全体の得点も男子において女子よりも相関係数の値が大きかった。

また、Big Fiveとの関係においては、男女ともに外向性及び開放性と正の相関、情緒不安定性と負の相関がみられた。誠実性と調和性については、やや低い正の相関にとどまった。

## 4. 考察

### 4. 1. 日本版ESCQについて

本研究の第1の目的は、日本版ESCQを作成することであった。Taksic(2002)の原版通りに45項目が弁別性の高い3つの因子に分かれることはなかったが、3因子構造になった。そして、第3因子の $\alpha$ 係数が幾分低いものの一応の信頼性を確保できる値であった。また、3つの因子 (下位尺度) 間の相関係数は.30~.42の範囲内であり、これは原版の.35~.50にほぼ匹敵する値である。また、尺度全体と各下位尺度との相関も.63~.84であ

り、比較的高い値である。ただし、原版は.88~.92とかなり高くなっており、この点が一致しない。しかし、原版のこの値はかなり高い値であり、本研究で見いだされた値程度で尺度の信頼性を保証するのに充分であると考えられる。したがって、本研究の第1の目的である日本版ESCQの作成に関しては、Table 1に示された項目を日本版ESCQとした。

ただし、問題点も指摘できる。それは、項目数が多いということである。本研究では原版のESCQの45項目を因子分析等によって最終的に28項目に整理した。しかし、それでも第3因子の $\alpha$ 係数に反映される信頼性の問題がある。また、先に紹介したWLEIS (Wong & Law, 2002) は16項目のみから構成されている。もちろん、両尺度によって測定する内容の違いがあるが、項目を精選する必要がある。したがって、今後の課題は、本研究の結果に基づいて短縮版ESCQを作成することである。

### 4. 2. 自尊感情との関係について

本研究の第2の目的は、日本版ESCQで測定される情緒的コンピテンスと、自尊感情及びBig Fiveにおける性格特性との関係を明らかにすることであった。

自尊感情に関しては、予想した通り、正の相関が認められた。原版のESCQにおいても自尊感情との正の相関が見いだされている (Taksic, 2002)。そして、原版とほぼ一致する相関係数の値となっている (「情緒の認識と理解」に関して、Taksic(2002)では.20、本研究では.23、「情緒の表現と命名」では.33と.35、「情緒の制御と調整」では.44と.34、ESCQ全体では.42と.38)。したがって、日本版においても、確かに情緒的コンピテンスは、自尊感情の高さと強い関連性のあることが明らかになったのである。ただし、本研究の結果で注目したいのは、男子と女子の差である。原版では性差に関して言及されていないが、Table 2の相関係数を見る限り、日本版においては明らかに男子の方が女子よりも自尊感情との関連性の強いことがわかる。

#### 4. 3. Big Fiveとの関係について

Big Five尺度との関係においては、Taksic (2002) の結果とほぼ同じ結果が得られた。すなわち、外向性、開放性、誠実性及び調和性とは正の相関、情緒不安定性とは負の相関が得られた。Taksic (2002) では、情緒不安定性が情緒安定性として得点化されており、正の相関が得られている。したがって、日本版ESCQにおいても、Big Fiveとの関係が見出されたのである。ただし、情緒不安定性においては、自尊感情と同じく性差が認められ、男子の方が女子よりも関係が強かった。したがって、今後の研究においては性差を考慮することが必要であろう。

Law, Wong & Song (2004) においても、Big Fiveと様々な情動知能を測定する尺度得点（例えば、WLEIS）との関係が分析されている。しかし、そこでは、単にBig Fiveとの関連性を検討するだけではなく、情動知能がBig Fiveを代表とする性格特性と関連性はあるが、別の概念であることを実証するために用いられており、情動知能の本質を検討する試みである。具体的には、情動知能と性格の共通部分と差異部分を明確に規定するための試みであろう。本研究では、ESCQのみを用いたが、他の情動知能測定尺度とBig Five尺度の関連性を検討することが必要であろう。そのためには、情動知能の定義を整理するとともに、その定義に対応して開発された尺度の整理も併せて行うことが今後の課題である。

(付記)

本研究のデータ整理に関しては、奈良教育大学総合教育課程生涯教育臨床専修生涯発達臨床系（心理学専攻）4回生の小林加奈さん、大賀香織さん、学校教育教員養成課程心理学専攻4回生島津美野さん、高野由希恵さんの協力を得た。記して感謝の意を表します。

#### 5. 引用文献

Bagby, R. M., Taylor, G. J., & Parker, J. D. 1994 The twenty-item Toronto Alexithymia Scale: II. Convergent, discriminant, and current validity. *Journal of Psychosomatic*

*Research*, **38**, 33-40.

Davies, M., Stankov, L., & Roberts, R. D. 1998 Emotional intelligence: In search of an elusive construct. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 989-1015.

Fineman, S. (Eds) 1993 *Emotions in organizations*. London: Sage.

Goldberg, L. R. 1990 An alternative "description of personality": The Big-Five factor structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 1216-1229.

Law, K. S., Wong, C. S., & Song, L. J. 2004 The construct and criterion validity of emotional intelligence and its potential utility for management studies. *Journal of Applied Psychology*, **89**, 483-496.

Mayer, J. D., Caruso, D. R., & Salovey, P. 2000 Selecting a measure of emotional intelligence: The case for ability testing. In R. Bar-On & J. D. A. Parker (Eds.), *Handbook of emotional intelligence*, Pp.320-342. San Francisco: Jossey-Bass.

Mayer, J. D., & Salovey, P. 1997 What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. Sluyter (Eds.), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. Pp.3-34. New York: Basic Book.

Riggio, R. E., & Trockmorton, B. 1986 Manual for the social skills inventory (SSI), Department of Psychology, California State University, Fullerton.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.

Salovey, P., & Mayer, J. D. 1990 Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, **9**, 185-211.

Schutte, N. S., Malouff, J. M., Hall, L. E., Haggerty, D. J., Cooper, J. T., Golden, C. J., & Dornheim, L. 1998 Development and validation of a measure of emotional intelligence. *Personality and Individual Differences*, **25**, 167-177.

Taksic, V. 2002 The importance of emotional intelligence (competence) in positive psychology. Paper presented at The first International positive psychology summit, Washington, D. C., October 4-6.

和田さゆり 1996 性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成心理学研究, **67**, 61-67.

Wong, C. S., & Law, K. S. 2002 The effects of leader and follower emotional intelligence on performance and attitude: An exploratory study. *The Leadership Quarterly*, **13**, 243-274.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

